

新約聖書の中の祈り 第7回

□「祈り」に関する学び全体のテーマ

1. 祈りの原則
2. 祈りの3つのタイプ
3. 旧約聖書の中の祈り
4. 新約聖書の中の祈り
5. 祈りの条件
6. 祈りの構成と内容
7. 祈りのルール
8. 祈りの諸問題

□「新約聖書の中の祈り」のアウトライン

1. イエスの祈り
2. 福音書における他の祈り
3. 使徒の働きにおける祈り
4. 書簡における祈り

□「イエスの祈り」のアウトライン・・・福音書の中から、イエスの祈りについて22の事例を取り上げ、それぞれに祈りの場所や時間、そのときの姿勢、祈りの内容、そして祈りがどのように答えられ、どのような出来事につながっていったか、などを見ていきます。

1. 洗礼を受けたときの祈り
2. 第一のメシア的奇跡をはさんでの祈り
3. 十二使徒を選んだときの祈り
4. 五千人の給食を前にしての祈り
5. 五千人の給食の後の祈り
6. 四千人の給食のときの祈り
7. ペテロの信仰告白を前にしての祈り
8. イエスの変貌のときの祈り
9. 70人の弟子が帰ってきたときの祈り
10. 「主の祈り」に先立つ祈り
11. 子どもたちを祝福したときの祈り
12. ラザロのよみがえりのときの祈り
13. ギリシヤ人がイエスに面会を求めたときの祈り
14. 最後の過越の食事での祈り
15. 最後の過越の食事の間での ペテロのための祈りへの言及
16. 将来、聖霊が信者の内に住んでくださることについての祈り

17. 大祭司としての祈り

- 18. ゲッセマネにおける祈り
- 19. 差し控えられた祈りについての言及
- 20. 十字架からの祈り
- 21. エマオにおける祈り
- 22. 昇天を前にしての祈り

□「イエスの祈り」の22の事例から見る24のポイント

- 1. イエスは、しばしば、一人になって祈るようにしていた。
- 2. イエスが祈りをした時間帯は、さまざまである。朝であったり、夕であったりである。
- 3. イエスが祈りをしたときの姿勢も、さまざまである。立って、ひざまずいて、あるいは顔を地面につけて、天を見上げて、というように。
- 4. イエスの祈りは、しばしば、重要なターニングポイントとなる出来事の直前に祈られている。
- 5. イエスは、大いなるみわざをするときにも祈った。
- 6. イエスは、プレッシャーを受けたときにも祈った。
- 7. イエスは、悲しみのときにも祈った。
- 8. イエスは、死の直前にも祈った。
- 9. イエスは、とりなしの祈りをした。ペテロのため、イエスを十字架に釘付けにした兵士たちのため。
- 10. イエスの祈りの時間は、長短さまざまであった。夜通しや、1時間など。
- 11. イエスは、父なる神に対して祈った。誰に祈るのか、父なる神である。
- 12. 祈りのタイプはさまざまである。請願、祝福、感謝、とりなし。
- 13. イエスは、聖霊に満たされ、喜びにあふれて祈ったことがあった。
- 14. イエスは、「祈りの本」によらずに、その時その場、自分のことばで祈った。
- 15. イエスは自分の感情が大きく動く中で祈ったことがあった。
- 16. イエスは、個人的にも公けにも祈った。
- 17. イエスは、ほとんどの場合、信者のために祈った。不信者のための祈りは稀である。
- 18. イエスが祈る動機の中には、神の栄光を含んでいた。そして、私たち自身と他の人々の霊的に益となることを含んでいた。
- 19. イエスの祈りは、漠然としてはいなかった。誰のために何を祈り求めるのか、はっきりとしていた。
- 20. イエスは、祈りの中で何かを願い求めるときには、その理由を明確にした。
- 21. イエスの祈りは、誰かと対話しているような調子であった。
- 22. イエスは自分の祈りがすべて聞かれているという確信をもっていた。その一方で、祈りの中で求めたことが、すべてそのとおりに答えられたというわけではない（マタイ 26 : 36～46）
- 23. イエスは、祈りの中で何かを願い求めるときには、父なる神のみこころにかなうのであれば、という条件付きで求めた。
- 24. イエスは、祈りの中で何かを願い求めるときに、その願いを繰り返し言うことがあった。

イエスの祈り 22の事例の中から、17番「大祭司としての祈り」

17. 大祭司としての祈り

- (1) メシアの役割は、預言者・大祭司・王。最後の過越の食事を終えて、イエスの役割は「大祭司」へと移行した。
- (2) ヨハネ 17:1~26 これは、大祭司としての役割を開始したことを示す祈り
- (3) イエスの祈り、22の事例の中で、最も長い祈り
- (4) とてもよく構成された祈り、大きく分けると3つの区分
 - A) イエス自身のための祈り (1~8節)
 - B) 特に11人の使徒たちのための祈り (9~19節)
 - C) すべての信者たちのための祈り (20~26節)

前回までにAとBを扱いました。本日は、AとBの要点を振り返り、C) すべての信者たちのための祈り を学びます。

A) イエス自身のための祈り (1~8節)

1. アウトライン

- (1) 祈る先：父なる神
- (2) 祈りの内容：願い求めが二つ
 - ① 父から与えられた使命を完遂しますように (1~4節)
 - ② 再び神の栄光に輝きますように (5~8節)

2. 一つ目の願い求め「使命を完遂しますように」(1~4節)

- (1) イエスの姿勢と視線、祈りの対象
 - ① 1節 「イエスは、目を天に向けて、言われた」・・・イエスの姿勢と視線
 - ② 1節 「父よ」・・・祈りの対象は、父なる神
- (2) 願い求めの内容
 - ① 1節 「時が来ました。あなたの子が、あなたの栄光を現わすために、子の栄光を現わしてください」・・・十字架につく時が来た。「子の栄光を現わす」とは、父なる神が御子イエスを死から復活させること。
 - ② 2~3節 「それは子が、あなたからいただいたすべての者に、永遠のいのちを与えるため、あなたはすべての人を支配する権威を子にお与えになったからです。その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。」・・・父なる神を知ること、そして父なる神がメシアを遣わしたこと、メシアは神であり人であるお方であると知ることが、永遠のいのちを受けることと直結している

- ③ 4節 「あなたがわたしに行わせるためにお与えになったわざを、わたしは成し遂げて、地上であなたの栄光を現わしました。」
- ④ 1節から3節まで事が進むと、4節の結果となる。
- イエスが十字架の上で、贖いの死を遂げる。
 - 父なる神がイエスを復活させて、子の栄光を現わす。
 - 復活したイエスは、信者すべてに永遠のいのちを与える。
 - その結果、父なる神の栄光が地上で現わされる。
- ⑤ 1～4節での願い求めは、一言で言うならば、父から与えられたわざをイエスが成し遂げることができるように、との祈りである。
3. 二つ目の願い求め「再び神の栄光に輝きますように」(5～8節)
- (1) 祈りの対象 5節「父よ」
- (2) 願い求めの内容
- ① 5節 「今は、みそばで、わたしを栄光に輝かせてください。世界が存在する前に、ごいっしょにいて持っていましたあの栄光で輝かせてください。」・・・イエスが受肉前に持っていた栄光を回復することを指す。
- ② 受肉によってイエスの栄光は、ベールに包まれたような状態。イエスの願い求めは、そのベールをはずすことである。
- (3) その理由：6～8節で、イエスは、父にそのような願い求めをする理由を語る。
- ① イエスは、父なる神について、弟子たちに明らかに知らせめた(6節前半)
- ② その中で特にイエスが教えたのは、弟子たちと父なる神との関係、弟子たちと子なる神との関係、そして弟子たちとみことばとの関係であった(6節～8節前半)
- ③ 8節後半では、イエスが弟子たちへ教えたことに対して、弟子たちがどうするかが総括されている。
- 彼らは、それを受け入れた(受け取った)→それを確かに知った→それを信じた

B) 特に 11 人の使徒たちのための祈り (9～19 節)

1. アウトライン

- (1) 誰のために祈るのか：9 節 「わたしは彼らのためにお願いします」・・・「彼ら」とは 11 人の使徒たち。
- (2) 願い求めが三つ：イエスは 10 節から 19 節において、彼らのために 3 つのことを祈った
 - ① 彼らが保たれますように (10～14 節)
 - ② 彼らが守られますように (15～16 節)
 - ③ 彼らが聖別されますように (17～19 節)

2. 一つ目の願い求め 「彼らが保たれますように」(10～14 節)

- (1) 「あなたの御名の中に」
 - ① 11 節 「あなたの御名の中に、彼らを保つてください」・・・一つ目の願い求めは、11 人の使徒たちが保たれますように、ということ
 - ② 「保つ」と訳されている原語は、保護するために見守ることを意味する。
- (2) 「あなたの御名」について、「あなたがわたしに下さっている」とある。父なる神の御名であるが、それがイエスにも与えられている。父なる神とイエスが一つであることを示す。
- (3) 【補足】その名が何というのか、ここでは明らかにされていないが、イエスの名前について、次の 2 か所を参照する。
 - ① イザヤ 9：6～7・・・旧約の預言者イザヤは次のように、メシア預言を語っていた。「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は『不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君』と呼ばれる。その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。」
 - ② 黙 19：11～16・・・再臨のイエスが持つ名が、次のように記されている。「忠実また真実」(11 節)、「ご自身のほかだれも知らない名」(12 節)、「神のことば」(13 節)、「王の王、主の主」(16 節)
- (4) この願い求めをする理由 5 つ
 - ① 9～10 節 使徒たちは、父なる神のものであり、父なる神がイエスに与えたものである。そしてイエスは、彼らによって栄光を受けた。
 - ② 11 節 イエスは、もうすぐこの世を去るが、彼らはこの世に残る。だから、彼らには保護的な見守りが必要である。その見守りの目的は、彼らが一つとなるためである。それは、父なる神とイエスが一つであるのと同様に、彼ら

も一つとなるためである。

③ 12 節 イエスは、この世にいる間は、使徒たちを、御名の中に保ち、守った。滅びの子＝イスカリオテのユダだけは、その保護から取り除かれたが、「聖書が成就されるため」・・・そのことはあらかじめ神はご存じであった。旧約預言で預言されていた。

④ 13 節 イエスは、もうすぐこの世を去る。今、その残されたわずかな時間であるが、そのときを彼らのための願い求め、祈りにあてている。自分が去っても、彼らが「わたしの喜び」、イエスにある喜びによって満たされるためである。

⑤ 14 節 使徒たちは、この世から憎まれるであろう。なぜなら彼らは、この世にいるけれど、もはやこの世のものではないからである。

3. 二つ目の願い求め 「彼らが守られますように」(15～16 節)

(1) 願い求めの内容・・・15 節 「彼らを、悪い者から守ってくださるようお願いします」 「悪い者」とは、サタンである。

(2) この願い求めをする理由・・・15～16 節 彼らは、この世に残る。しかし、彼らをこの世から取り去ってくださいますとは祈らない。イエスがこの世のものでないように、彼らもこの世のものではない。よって、彼らがこの世にある限り、父が彼らを悪い者から守ってくださる必要がある。

4. 三つ目の願い求め 「彼らが聖別されますように」(17～19 節)

(1) 願い求めの内容・・・17 節 「真理によって彼らを聖め別ってください。あなたのことばは真理です」

① 「聖め別つ(きよめわかつ)」と訳されている原語の基本的な意味は、「別に取り分けること」である。

② イエスは、使徒たちが神のものとしてこの世から別に取り分けられ、聖なる目的のために用いられるようにと、祈っている。

③ 使徒たちをこの世から別に取り分けるための手段は「真理」、すなわち「神のことば」である。

(2) この願い求めをする理由・・・18 節 イエスが父なる神によって世に遣わされたように、使徒たちはイエスによって世に遣わされる。彼らはそのためにふさわしく備えられる必要がある。

(3) イエスが自分自身を聖め別つことについて

① 19 節前半 「わたしは、彼らのため、わたし自身を聖め別ちます」

② イエスが自分自身を聖別するとは・・・具体的にはヨハネ 15 : 10 「わたしがわたしの父の戒めを守って、わたしの父の愛の中にとどまっている」ことを指す。

③ イエスは父なる神によってこの世とは別に取り分けられただけではなく、自

分自身でも、父の戒め、すなわち神のことばによって、自分を聖別し、父の愛の中にとどまっている、というのである。

- ④ そして、それは自分のためではなく、「彼らのため」、11 人の使徒たちのためである。

- ⑤ 19 節後半 「彼ら自身も真理によって聖め別たれるためです」 イエスと同様、使徒たちも、自分自身を聖別する必要がある。使徒たちが神のことばによって自分自身をこの世とは別に取り分けられるようにすること、これが使徒という特別な役目を果たすうえで必要だからである。

(4) 【補足】イエスと使徒たちが自分自身を聖別することについて

- ① イエスが自分自身を聖別する、すなわち自分自身をこの世から取り分けるといとき、イエスはどこにいるのか？・・・ヨハネ 15：10「父の愛の中」
- ② 11 人の使徒たちは、父なる神によってこの世から別に取り分けられ、そして同時に神のことばによって自分自身をこの世から取り分ける。では、彼らはどこにいるのか？・・・ヨハネ 15：3～4「イエスにとどまる」、9～10「イエスの愛の中」
- ③ 使徒たちがこの世から取り分けられると、彼らはどうなるのか？・・・ヨハネ 15：7～8「実を結ぶ→父が栄光を受ける」

C) すべての信者たちのための祈り (20～26 節)

1. アウトライン

(1) 誰のために祈るのか・・・すべての信者のために (20 節)

- ① 「わたしは、ただこの人々のためだけでなく、彼らのことばによってわたしを信じる人々のためにもお願いします」 (20)
- ② 「この人々」、「彼ら」・・・11 人の使徒たち
- ③ 「彼らのことばによってわたしを信じる人々」
 - 使徒たちが十字架の福音を宣べ伝えることにより、それを聞いて信じて救いを受ける人々
 - さらに、その人々が使徒たちの教えを次の世代に伝えることにより、それを信じて救いを受ける人々も含む。
- ④ よって、使徒たちと将来の信者たちを含む、すべての信者たちのための祈り

(2) 祈りの内容・・・願ひ求めが二つ (20～24 節)

- ① 信者たちが、みな一つとなりますように (20～23 節)・・・信者の一致
- ② 信者たちが、わたしがいる所にわたしといっしょにおらせてください。そして、わたしの栄光を見ますように (24 節)・・・信者の栄化

(3) 祈りの結び (25～26 節)

- ① ここでイエスは、父に願ひ求めるだけでなく、ご自分はこれから何をするか、を語る。
- ② それは、復活・昇天のあとも、使徒たちのために (ひいては、すべての信者たちのために)、父なる神がどのようなお方であるかを知らせ続ける、というのである。
- ③ その目的は父なる神の愛が彼らの中にあるため

2. 一つ目の願ひ求め「信者の一致」(20～23 節)

(1) 願ひ求めの内容 (20～21 節 a)

- ① 20～21 節 a 原文の語順にそって直訳「ただこの人々のためだけでなく、わたしはお願いします、彼らのことばによってわたしを信じる人々のためにも、彼らがみな一つとなることを、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにいるように、彼らもわたしたちにあって一つとなることを。」
- ② 下線部・・・「お願いします」という願ひ求めの内容は、「彼らがみな一つとなる」ことを、である。この願ひ求めが 2 回繰り返されている。
- ③ 二重下線部・・・信者の一致のための前提
 - ここで、イエスは、信者たちの一致について、前提条件を祈っている。

二重下線部の「あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにるように」、
「わたしたちにあって」である。

- 信者たちが互いに一致するためには、信者一人ひとりが父なる神と子なる神の中にいること、すなわち神との交わりの中にあることが、前提である。
- 信者一人ひとりが神との交わりの中にあること。それを保持するための方法は、Iヨハネ1:9である。

(2) 願い求める理由 (21 節 b)

- ① 21 節 b 「そのことによって、あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるためです」
- ② 信者の一致を見るなら、世の人々は福音を信じる

(3) 福音宣教は信者に与えられた栄光ある使命 (22 節)

- ① 22 節 「またわたしは、あなたがわたしに下さった栄光を、彼らに与えました。それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つであるためです。」
- ② 下線部の「あなたがわたしに下さった栄光」とは・・・父なる神がイエスに行わせるためにお与えになったわざ。イエスはそれを成し遂げて、地上で父なる神の栄光を現わした (17:4)
- ③ それは、どのようなわざか・・・父なる神が選んだ人々に、唯一のまことの神である父なる神を知らしめること、そして父なる神がイエス・キリストを遣わしたことを知らしめることである (17:3)。それはまた、「父なる神の御名を明らかにする」ということでもある (17:6)。
- ④ したがって、「あなたがわたしに下さった栄光」とは、信者が父なる神について証しすること、父なる神がイエス・キリストを遣わしてくださったことについて宣べ伝える、という使命である。
- ⑤ この使命は、まずイエスが使徒たちに向けて行った。次に、使徒たちが十字架と復活の福音を伝える中で人々に向けて行う。22 節では、イエスは、この栄光ある使命を、使徒たちを含むすべての信者たちに与えた、と祈っている。
- ⑥ 22 節の後半、「それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つであるためです」・・・栄光ある使命、すなわち父なる神の御名を明らかにするという使命の場において、信者の一致が生まれる。

(4) 信者の一致のための基盤はイエスの内住 (23 節 a)

- ① 23 節 a 「わたしは彼らにおり、あなたはわたしにおられます。それは、彼らが全うされて一つとなるためです」
- ② 「彼らが全うされて一つとなる」
 - 信者が完全で欠点のない人になれば、信者の一致が得られるということでは、ない。

- 「全うされる」とは、信者が神によって信仰的に成長させていただき、成熟した、言い換えれば大人の信仰を持つということである。
 - 大人の信仰とは、罪を犯さなくなることではない。罪を犯したときの対処を心得て、それを実行できる信仰である。
 - Iヨハネ1:9によって、父なる神に向かって祈り、自分の罪を告白すること。すると、気づいていない罪も含めてすべての悪からきよめられると神は約束してくださっている。神は真実な方であるから、ご自分の約束を必ず守ってください、信者をきよめてくださる。神との交わりは、罪の告白の祈りにより回復される。この祈りは、信者の信仰生活の中で、最も重要な祈りである。
 - そのような日々の信仰生活を通して、信者は成長していく。これを、聖化という。聖化を積み重ねていくのが信仰生活であり、そのような信仰生活を送る信者が、大人の信仰者である。
- ③ 「(そのために) わたしは彼らにおり、あなたはわたしにおられます」
- 信者が、信仰的に成長できるのは、信者の内に、イエスの御霊が住んでくださるからである。
 - よって信者たちが全うされて一致することができるのは、二重下線部のことが基盤である。「わたしは彼らにおり」、イエスの御霊が信者の内に住んでおられる。
- ④ 「あなたはわたしにおられます」・・・父なる神はイエスとともにおられる、父なる神と子なる神とは一つ、一致しておられる
- イエスの御霊が信者一人一人の中に住んでおられるから、信者は父なる神ともいっしょにいることになる。
 - 信者一人ひとりの中に、イエスの御霊が住んでおられ、父なる神も共にいてくださるから、信者は神のみこころを知り、それに従うことが可能となる。
 - 信者一人ひとりが神との交わりを保つときに、信者同士の一致が可能となる。
- ⑤ よって、イエスの御霊が信者一人ひとりの中に住んでおられること、これが信者同士の一致のための基盤である。
- (5) 願い求めの理由(再び): 23節b 「それは、あなたがわたしを遣わされたことと、あなたがわたしを愛されたように、彼らをも愛されたことを、この世が知るためです。」
- ① 信者が一致しているとき、そのまわりの世の人々は、父なる神がイエスをこの世に遣わされたこと、そして信者たちは父なる神の愛の中にいることを知るであろう。

- ② 信者たちが、自分たちについて、父なる神から愛されていると確信するがとて重要である。そこから、神に愛されている者同士として、信者相互の一致が生まれ、世に向かって父なる神の愛を証しする者たちとなる。

3. 二つ目の願い求め 「信者の栄化」 (24 節)

(1) 願い求める先：「父よ、お願いします」(24 節)

(2) 【補足】24 節の直訳 前半 (a) と後半 (b) は、次のようになります。

- ① 24 節 a 「父よ、お願いします、あなたがわたしにくださったものを、わたしのいる所にわたしといっしょにおらせてください。そして、わたしの栄光を彼らが見るようにしてください。」(願い求め)
- ② 24 節 b 「それは、あなたがわたしを世の始まる前から愛しておられたからです。」(願い求める理由)

(3) 願い求めの内容

- ① 24 節 a 「あなたがわたしにくださったものを、わたしのいる所にわたしといっしょにおらせてください。そして、わたしの栄光を彼らが見るようにしてください。」
- ② 下線部「もの」とあるが、そのあとに「彼ら」とあるように、信者たちを指す。
- ③ 信者たちは「あなたがわたしに下さった」人々である。父なる神が信者たちを選び、子なる神イエスに与えたのである。
- ④ 【補足】信者たちは、主イエス・キリストのものである。よって、洗礼では、主イエス・キリストの御名によって洗礼を受ける。これは、受洗者は信じたときに、主イエス・キリストのもの、キリストに属する者となったことを象徴する。同時に、子なる神と父なる神の御手の中にあるがゆえに、信者は何者によっても奪われることはない。救いは決して失われない。信者本人が信仰を捨てたとしても、神の御手の中から落ちることはできない。
- ⑤ ここで、イエスが祈り求めたことは、信者たちをイエスのいる所にいっしょにおらせてください、ということ。
- ⑥ これは、信者の栄化である。
- 救いは、義認・聖化・栄化の3つの段階を進む。
 - 義認：信仰を通し神の恵みによって人は、義人として認められ、「聖なる者」としての地位をいただく。神の国に入ることのできるのは義人であるから、信仰を通して救われたそのときから、信者は神の国に入る者とされる。これが義認である。
 - 聖化：信者は、信仰生活を通して、その内側が「聖なる者」にふさわしく変えられていく。これは、神のみわざである。それを受け取るのもま

た、信仰を通してである。信者の内側には罪の性質が残っている。一方、救われたときに新しい性質をいただいている。使徒パウロは、罪の性質を「肉」、新しい性質を「霊」と呼ぶ。肉に従わず、霊に従っていくという選択を積み重ねていく歩みが、聖化のプロセスである。

- 栄化：信者のからだの贖いである。罪の性質によって死ぬべきこの体が変わられて、イエスの復活の体と同様にもはや死ぬことのない体（栄光のからだ）として、信者に与えられることである。その栄光の体の中には、もはや罪の性質はない。その意味で、聖化の究極的ゴール、最終的聖化とも言える。
- ⑦ 教会の信者たちの栄化は、教会の携挙のときに実現する。
- 教会の信者たちの中で、すでに肉体の死を経てその霊魂が天のパラダイスにいる信者たちの霊魂は、そのとき地上に戻り、栄光のからだを受け、復活して地上に立つ。
 - 地上に生き残っている信者たちは、肉体の死を経ることなく、一瞬のうちに栄光の体に変換される。
 - 両者ともに天に引き上げられ、空中で主と会う。そして、イエスのいる所（第三の天）に入り、イエスといっしょにいることとなる。「このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります」（Ⅰテサ 4：17）。
 - これが教会の携挙である。

(4) 願い求めの理由

- ① 24 節 b 「それは、あなたがわたしを世の始まる前から愛しておられたからです。」
- ② 信者が栄化されるベースは、父なる神が子なる神を愛するがゆえである。信者の行いによるのではない。

4. 祈りの結びのことば（25～26 節）

(1) アウトライン

- ① ここでイエスは、父に願い求めるだけでなく、ご自分はこれから何をするか、を語る。
 - ② それは、「これからも」（復活・昇天のあとも）、使徒たちのために（ひいては、すべての信者たちのために）、父なる神がどのようなお方であるかを知らせ続ける、というのである。
- (2) 25 節 「正しい父よ。この世はあなたを知りません。しかし、わたしはあなたを知っています。またこの人々は、あなたがわたしを遣わされたことを知りました。」・・・「この人々」とは、11 人の使徒たちである。

(3) 26 節 「そして、わたしは彼らにあなたの御名を知らせました。また、これから
も知らせます。それは、あなたがわたしを愛してくださったその愛が、彼らの中
にあり、またわたしが彼らの中にいるためです。」

① イエスは、復活・昇天の後も、11 人の使徒たちに、父なる神の御名を知らせ
続ける。

② その目的は二つ

- イエスを愛する父なる神の愛が、使徒たちの中にあるために
- イエスが、彼らの中にいるために

(4) 父なる神の御名を知らせるとは、父なる神の愛について教え、体験させることであ
る。その結果、父なる神の愛が、使徒たちの中に満ちあふれることとなる。そ
れは、イエスの御霊が使徒たちの中におられる証しでもある。

(5) 【私たちへの適用】

① この祈りの結びのことばは、使徒たちだけでなく、彼らの宣教によって信者
となるすべての信者にも、あてはまる。

② イエスは、現代の私たちにも、父なる神の御名を知らせようと願っておられ
る。

③ 父なる神の御名を知ることは、

- 父なる神がどのようなお方なのかを知ること
- 父なる神が遣わされたイエスを知ること
- 父なる神が私たち信者を愛して、私たちを選び、この世から呼び出し、
イエス・キリストにある者とし、将来の栄光へと導いてくださっている。
その父なる神の愛の中に、いつもとどまること

④ この三つに立つとき、信者は一致する

5. 17 番の祈りから学ぶこと

(1) 誰に対して祈るのか・・・父なる神

- 信者が願い求め、感謝し、賛美するお方は、父なる神である

(2) 誰のために祈るのか・・・自分自身のために、自分と直接関係する信者たちのた
めに、その信者たちと関係する信者たちのために

- イエスは、不信者のために祈ることは稀であった。
- 信者のために祈ることが、彼らの働きを通して不信者へ福音を伝えるこ
とになる。
- 何よりも信者が一致しており、父なる神の愛の中にとどまっていること。
これを見て世の人々は、父なる神とイエス・キリストを信じる。

(3) 願い求める祈りをするときは・・・その理由も

(4) 祈りの中で自分がなすべきことを示されたら、それも祈る